

Chulalongkorn 大学テニス部との交流

山田幸雄

A report on Chulalongkorn University expedition

Yamada Yukio

1 はじめに

筑波大学第20期外国人教員研修留学生プログラムに参加していたのが、今回の交流でお世話になったチュラロンコン大学のスッタナ (Suthana Tingsabhat) さんであった。スッタナさんは、タイ王国の中から選抜されて来日し、筑波大学で18ヶ月間の研修を行っている最中であった。主に、日本語教育や日本の教育事情、及び日本のスポーツ教育事情に関する研究を行っていた。指導教官は、体育科学系教授の諏訪伸夫先生であった。

スッタナさんがチュラロンコン大学でテニスの授業、及びテニスチームの指導を行っているということで、諏訪先生が私に紹介して下さいました。

スッタナさんとは一緒に食事をしたり、私のテニスの授業に参加したりした。授業の学生の中に、タイで1ヶ月間ほどボランティア活動を行ってきたという学生もいて話が弾んだ。また、学園祭ではタイから筑波大学に留学している学生、大学院生達がオープンしたタイ料理の模擬店に招待され、おいしいタイ料理をごちそうになった。その収益金は、タイでの教育活動に寄付するということがあった。

このように、スッタナさんとは、テニスを

通していろいろなところで話が弾んだ。その中で、スッタナさんとの間にチュラロンコン大学テニス部と筑波大学テニス部との交流を行おうという話が自然と持ち上がった。このような形で、筑波大学テニス部にとって、初めての海外交流が行われることになった。

日程は、2002年2月14日～18日の5日間であった。タイは11月から2月までの4ヶ月が1年のうちで一番気候はよいといわれている。昨今の東南アジアブームの影響もあり、また、タイでは旧正月を祝う時期でもあるため、飛行機は満杯であった。気候がいいといっても、実際5日間過ごしてみると、日中は33、34度はありそうで湿気もかなりなものであった。しかし、食事はおいしく、治安もよく快適な5日間であった。

2 Chulalongkorn 大学との交流

筑波大学テニス部の中から Chulalongkorn 大学との交流を希望する部員を募り、遠征を行った。テニス部長阿部生雄先生、スッタナさんの指導教官であった諏訪伸夫先生、テニス部男子5名、女子5名、それに私を加えた総勢13名によるタイへの旅であった。学生の中には、初めて飛行機に乗る者もいた。今回の交流は、テニスの試合というよりもチュラロンコン大学のテニス部の学生との交流を

深めることが大きな目的であった。

これをいい機会にして、さらなる交流の輪が広がればと考えている次第である。

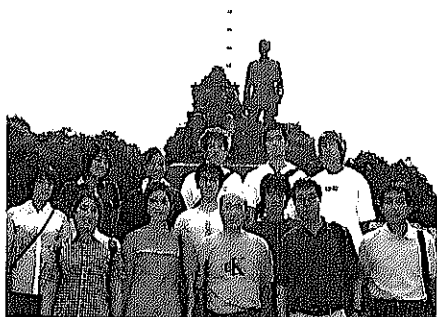


写真1 チュラロンコン王とその息子さんの銅像の前で筑波大学テニス部遠征メンバー

Chulalongkorn 大学の歴史

2月15日は、チュラロンコン大学の学内を案内していただいた。チュラロンコン大学の歴史資料館には、老齢の館長がおり、詳しく丁寧に説明してくれた。チュラロンコン大学のタイ国内における位置づけ、歴史の古さ、王家との繋がり等、明らかに他の大学とは違うという印象を持った。

チュラロンコン大学は、今の国王から遡ること4代前の第5代国王であった Chulalongkorn 王(写真1参照)が作った大学である。今でも、王家との繋がり深く、卒業式等の重要な大学の行事には、必ず現国王が出席するということがあった。また、唯一王家の紋章を大学の校章に載っている大学である。スクールカラーは、ピンクである。タイでは、生まれた曜日によって、自分の色が決められている。Chulalongkorn 王は火曜日に生まれ、火曜日の色がピンクであったため、大学のスクールカラーはピンクであるということであった。

交流試合

今回は、テニス部の中から希望者を募り、

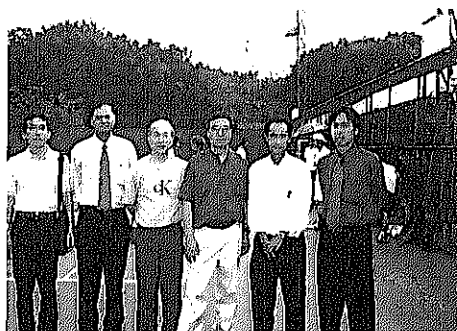


写真2 筑波大学とチュラロンコン大学テニス部関係教官(チュラロンコン大学テニスコートで)

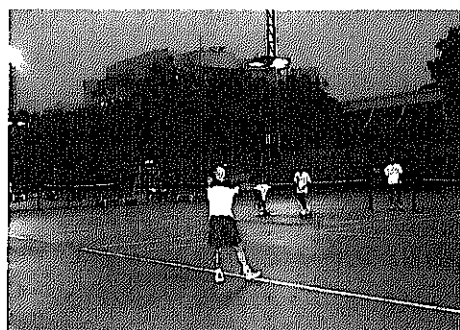


写真3 対抗戦風景



写真4 試合終了直後の記念撮影

遠征することになった。試合前に聞いたところ、チュラロンコン大学テニス部は東南アジア全域の大学で一番強いということであった。実際、かなり強く、希望者を募っての遠征では、男女とも全くといっていいほど歯が立たなかった。来年3月頃、チュラロンコン大学

が筑波大学に交流のため来日することになった。今度は、一矢報いたいと思っている。

15日の夕方からナイターで行われた試合の結果は、以下の通り惨敗であった(写真3, 4参照)。

男子シングルス

北村 哲 (2-6)

CHALERMULT APANKUL

伊藤 貴彦 (2-6)

SOONTARAT VONGPAK-
DEEPHUBAL

秋國 泰孝 (0-6)

CHALERMULT APANKUL

田中 皓也 (3-1)

SOONTARAT VONGPAK-
DEEPHUBAL

(時間の都合上、途中で打ち切り)

男子ダブルス

野中 隆 (5-7)

CHAPIVPOV RINTRANUR-
AK

伊藤 貴彦

PANAINUT NAVAWONG-
SE

女子シングルス

石田 純子 (2-6)

NAPANANT MONTLE-
HONGTHAM

小池 佐季 (4-6)

SULEEPOPON BOONDA

堀内 純子 (3-6)

KANOTHAI BOANFAK

女子ダブルス

田中 祥恵 (6-3)

NAPANANT MONTLE-
HONGTHAM

田中 三智子

SULEEPOPON BOONDA

チュラロンコン大学には、10面のハードコートがあり、照明も備え付けてあった。テニ



写真5 パーティでうち解けた頃の学生の様子

スコートは、いつも誰かが使っているという状況であった。なぜ、テニスコートは、満杯なのか尋ねてみると、授業、テニス部の練習以外の空いている時間は、テニス指導者に貸しているということであった。そこから、大学に収入が入るようになってきているようであった。

パーティー

15日の夜、Welcome パーティを開いてくれた。チュラロンコン大学の学生部長等も参加して、大学内にあるゲストハウスで行われた。ゲストハウスは、伝統的なタイ式の建物であり、タイの民族資料を保存している場所でもあった。タイの伝統的な楽器を演奏するチュラロンコン大学のクラブが参加してくれ、タイの民族音楽等を聞かせてくれた。私たちもタイの民族楽器を演奏してみたが、なかなか音を出すのが難しかった。しかし、小さい頃バイオリンを習っていた学生は、タイの伝統的な弦楽器をうまく引きこなし交流を深めていた。時間が立つにつれ、双方の大学のテニス部の学生、さらに演奏してくれた学生達を含めて親しく楽しく交流することができた(写真5参照)。会の終わりの方では、かなりうち解けて、会が終了した後、チュラロンコン大学の学生に案内されて、夜のバンコク市内に繰り出したそうである。何が楽しかったか等その時の様子は聞かなかったが、若さの特権

というべきか、うち解けるのも早く、若さの素晴らしさを阿部先生と話したものである。

17日の夜には、Farewell パーティを開いてくれた。場所はタイで一番高い建物の最上階にあるレストランであった。そこに行く途中、私は少し道に迷った。目的の高い建物は近くに見えるのであるが、なかなかたどり着けないのである。ビルの裏側は、トタン屋根の建物等もあり、目的の建物とのギャップに驚かされた。

78階から見渡したバンコク市内の夜景は素晴らしいかった。パーティでは、互いの大学の学生の代表によるスピーチが行われた。チュラロンコン大学テニス部の学生代表は、英語を専攻しているということで、流暢な英語で挨拶してくれた。筑波大学テニス部の代表学生は、なかなか英語が出てこず、日本語中心になってしまった。英会話の重要性を痛感した学生も多かったのではないかと思われる。

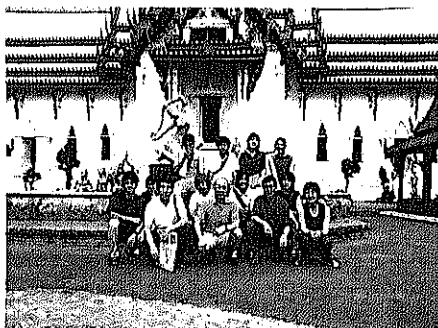


写真6 タイの遺跡の前で

3 タイの歴史遺跡

16日は、バンコク郊外にあるタイの歴史的遺跡等を集めた場所を案内してもらった。案内してくれたのは、テニス部の部長という30代前半の若い教授であった。ジュニアの頃は、強いテニスプレーヤーで、日本にもジュニアのトーナメントに参加するために来たことが

あるということであった。父親は現職の大臣であり、アメリカに7年間留学し博士号を取得したというタイの典型的なエリートであった(写真2右端の人物)。

この遺跡を訪れて感じたことは、タイは仏教国であると思い、学校でそう習ってきたので仏教だけが唯一の宗教かと思っていたが、ヒンズー、あるいはイスラムの影響もかなり受けているように感じた。同じ寺院の中に仏教に関する壁画とヒンズーに関する壁画が共存しているのである。

自由時間を使って、諏訪先生とタイの古都であるアユタヤにいった。非常に暑い日で自動車から降りて太陽が降り注ぐ道を歩くだけで身体が参ってしまうような旅であったが、メナム川のほりを周りながらタイの人々にとってメナム川がいかに重要な役割を担っているのかを感じずにはいられなかった。諏訪先生は、暑さにも負けず、100段はあろうかという階段を一気に登ってお参りをした。私は、暑さに参って階段を登る元気が出なかった。諏訪先生の体力には降参するばかりであった。

4 エピソード

13名で海外旅行をすると、必ずいくつかの面白い、いや大変であったというべき、エピソードがでてくる。今回もいくつかあったが、代表的なものを3つ書きたいと思う。まず、学生であるが、初めて飛行機に乗ったという2年生の男子は、両替にいている隙にみんなの集団から離れてしまった。ちょうど昼休みどきであったため、一人で昼食を取ることにした。お店に入り、たくさんの種類のタイ料理を食べようと思い、単品で8種類頼んだつもりであった。しかし、出てきたのはそれぞれ定食になった8人分が出てきたそうである。6人分までは頑張って食べたが、あとの2人分は食べきれなかったらしい。筑波大学テニス部の中でも一番の大食いの彼であったが、その後、腹痛に見舞われ、寒気がして、

夜の Farewell パーティの時も最初は気持ちが悪そうであった。しかし、パーティーの途中からは昼間のことは忘れてしまったのか、驚異的な回復をしたのかわからないが、しっかり他の部員以上に、また食べていた。恐ろしい食欲と体力である。

タイには、日本でいえば原付バイクにリヤカーを乗せたような乗り合いのタクシーみたいなものがある。ツクツクという名前で市民に親しまれている。料金はすべて運転手さんとの交渉で決まる。先ほどの腹痛に見舞われた学生は、一人で身振り手振りで交渉し、22パーツ、約70円で乗ったらしい。他の3人の部員は、交渉が下手なのか一人100パーツ、3人で300パーツ、同じ距離を約960円で乗ったらしい。3人は、約14倍もの金額を払ったことになる。それを聞いた残りの学生は、みんなまでどれくらい交渉して安くできるかツクツク乗車競争をしたらしい。その結果は、聞かずにまいである。

阿部先生は、一人で町中を散歩中、たばこの吸い殻を地面に捨てたそうである。いわゆる、たばこのポイ捨てである。たばこを吸っている時から警官がじろじろこちらをみていたそうである。たばこを捨てたところ、いきなり警察署に連行されそうになったらしい。慌てたかどうかはわからないが、たぶん慌てたと思うが、流暢な英語で反論したらしい。向こうの警官が英語を理解したかどうかはわからないが、阿部先生は、吸っているときに捨ててはだめだと注意すべきではないかと厳しく反論したらしい。日頃は温厚な阿部先生の反論に相手の警官もあきらめたのか解放してくれたらしい。もう少しで、阿部先生は、警官への暴言？と合わせて、タイの刑務所に収監されていたかもしれない。私は、これを機会に阿部先生に禁煙を進言しているところである。確認したところタイでは、シンガポールと違ってたばこを捨てても犯罪にはならないとのことであった。

私と友人は、タクシーに乗っていたらバンタイプの乗用車におつけられてしまった。タイの交通事情を考えると、いつ自動車事故が起こっても不思議ではないのであるが、「ギイー」という音と共に、タクシーが揺れたのである。タクシーの側面は大きく擦られ、かなり凹んだのである。ところが、相手の乗用車は逃げた。タクシーは、怒鳴り声を上げながら追いかけていった。当然、私達が行きたい場所とは離れていくことになる。運転手さんは、客が乗っていることなど忘れてしまったかのようである。カーチェイスのようになってきて、少し恐怖感を感じた。15分ほど経過してようやく信号が赤になったときに、タクシーがその乗用車の前に急ブレーキをかけて停車した。驚きである。ちょうど、そこは、他の交通事故が発生している場所でもあったため、警察官が一人いた。客の私達のことは忘れて言い争っている。仕方がないので、話に割り込んで、そこまでの料金を払って降りることにした。その後すぐ帰ればいいものを野次馬根性というべきか、どのように決着が付くのか見物した。ちががあかないので、二人とも警察で話が続くことになったようである。そこから、また、タクシーを拾って帰ることにした。夜は更けていた。

5 おわりに

今回のタイのチュラロンコン大学への交流遠征は、個人旅行と違い、私たちにとっても筑波大学テニス部の学生にとっても、有意義な5日間であったと思われる。

紫峰会からチュラロンコン大学への記念品の補助をいただいた。また、筑波大学テニス部のOB会からも援助をいただいた。ここに感謝申し上げる次第である。

個人旅行と違い、大学を代表して遠征することにより、これからのタイを担っていくような人々と交流することが出来た。このことは、筑波大学テニス部の学生にとっても大変

有意義なことであったと思われる。チャンス
があれば、これからも交流を続けていきたい

と考えている。